



若者の旅行における地域差 —地方学生と都市学生の旅行実態—

Regional difference in the trip of the youth:

Comparison of trip activities between urban and rural university students in Japan

小幡 夏音

Natsune OBATA

【要旨】

本研究は近年若者の旅行離れが進んでいることに対して、若者が旅行に行かない理由を居住地の地域環境と関連させて検討することを試みる。地方に住む若者と都市に住む若者の旅行実態を把握し、地域差が及ぼす旅行観への影響を明らかにすることを研究目的とする。研究方法は地方に住む大学生(新潟大学)と都市に住む大学生(専修大学、成蹊大学、その他)を対象にアンケート調査を実施し、その結果を各項目について単純集計・クロス集計を行い分析した。分析結果は以下の三点にまとめられる。一点目は、国内旅行において地方学生と都市学生では、旅行実態に違いがあることである。地方学生は旅行回数が多く、テーマパークやコンサートなど特定のアクティビティやコンテンツを目的に首都圏へ行く傾向が認められた。一方で、都市学生は癒しや休息を求め、温泉を目的に首都圏を含む近隣地域に行く傾向が高いことが分かった。二点目は、海外旅行は国内旅行に比べて、旅行回数や旅行目的以外に地域的な差が見られないということである。三点目は、アンケート回答者の出身地にも注目したところ、地方出身の都市学生の旅行回数が最も少なく、その理由は地方から都市に出てきていることから派生しているということである。以上から今回の調査結果において、居住地の地域差は国内旅行では影響があると考えられ、海外旅行ではその影響は薄いと考えられる。また、旅行回数に注目すると、全体的に都市学生の旅行回数が少ないことが分かった。文部科学省が継続している学校基本調査によると、最近 20 年間で都市に住む学生の人口が増加している。都市に居住する学生が増えていることから、旅行に行かない層が増えていると考えることができるのではないだろうか。つまり、地域差という視点から若者が旅行に行かなくなった理由を考察すると、人口分布の変化があげられると考える。

キーワード：旅行、若者、大学生、地域差、若者の旅行離れ

1. はじめに

1-1. 研究背景

近年、若者の旅行離れが問題視されており、国土交通省観光庁(2008、2011b)が発表してい

る統計情報には、その傾向が数値として表れている(表 1)。国内宿泊旅行回数を各年代別にみると、若年層(20~29 歳)の回数の落ち込みが激しいことがわかる(表 2)。

観光庁は 2010 年に「若者旅行振興研究会」

表1 若年層の国内宿泊観光旅行回数の推移

	若年層 (20~29歳)			国民 全体
	男性	女性	平均	平均
2003年度	1.18	2.16	1.67	1.70
2004年度	1.14	1.85	1.49	1.71
2005年度	1.12	2.22	1.67	1.77
2006年度	1.18	2.09	1.63	1.68
2007年度	1.16	1.95	1.56	1.50
2003~2007年度 増減回数	-0.02	-0.21	-0.11	-0.20
2003~2007年度 増減率	-1.6%	-9.7%	-6.5%	-11.8%

資料：国土交通省観光庁(2008)

を立ち上げ、現在および将来における旅行市場において若者の旅行状況に危惧を示し、振興に取り組んでいる。また株式会社リクルートライフスタイルが運営する「じゃらんリサーチセンター」が独自に行う全国の国内宿泊旅行調査からも、若者の旅行離れが明らかになっている。そのような状況を懸念し、じゃらんリサーチセンターでは若者の旅行を後押しするような企画を提案している。このように若者の旅行離れにおいて国や民間が一体となって取り組んでいる。旅行経験の乏しい若年層の増加は、将来的に日本の観光市場の衰退につながる深刻な問題であるといえよう。

既存研究からは若者が旅行に行かない理由として、時間的・経済的な理由が多くあげられている(金・鎌田 2010)。しかし、それぞれの条件を満たす場合、若者は旅行に行くのかという疑問が生じる。これについて日比野・佐藤(2012)は、若者の時間の使い方や所得のデータから、本当に時間的・経済的な余裕がなくなったのかを検証した。その結果、若者の余暇時間は増えているものの、旅行以外の活動に費やされていること、平均世帯所得の実質値は減少していないことが明らかになり、時間的・経済的な理由が若者の旅行をしない直接的な理由ではないことを示している。このことを踏まえ、今後は若者の志向や価値観、生活などの変化に目を向けなければならないと指摘している。

表2 2009年度宿泊旅行回数(前年比)

年代	旅行回数	前年比
20代	1.29回	(-0.31)
30代	1.24回	(-0.26)
40代	1.38回	(+0.08)
50代	1.35回	(+0.10)
60代	1.72回	(-0.19)
全体	1.42回	(-0.09)

資料：国土交通省観光庁(2011b)

1-2. 研究目的および研究方法

1) 研究目的

本稿では若者が旅行に行かない理由について、従来の研究とは異なった視点から検討することを試みる。若者の旅行観を形成しているものの一つとして、生活環境が考えられる。具体的には居住地の地域環境である。既存の研究では旅行観において地域差に注目したものが少なく、金川(2010)も京都の大学生と広島を調査した際に、地方と都市では旅行実態に差があると感じ、地域差について考える必要があるとしている。

本稿では若者の居住地の地域環境に着目し、地方に住む若者と都市に住む若者の旅行実態を把握すること、さらに旅行観への地域差の影響を明らかにすることを目的とする。

また、一言に若者と括っているが、その対象は調査により様々であり、一義的には捉えにくい。近年、大学進学率が50%を超えており、若者の半分以上が大学へ進学しているといえる。また、大学生は比較的旅行に対して時間的な余裕があると思われる。これらのことから、大学生を若者の代表として位置づけ、今回の調査では地方に住む大学生と都市に住む大学生を対象に調査を行う。

また、地方と都市の定義については明確な定義が存在していないため、国土交通省が大都市圏と称するものを都市、それ以外を地方と分類した。大都市圏には首都圏(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県)、中京圏(岐阜県、愛知県、三重県)、近畿圏(滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県)が含まれている。

2) 研究方法

地方に住む大学生(以下、地方学生)と都市に住む大学生(以下、都市学生)にアンケート調査を実施し、地域による旅行実態・旅行観の違いを明らかにする。地方学生は新潟県の新潟大学生、都市学生は神奈川県の特修大学生、東京都の成蹊大学生、そのほか都市に住む地方出身者を対象にアンケート調査を行った。

調査内容は、大学入学から現在までの宿泊を伴う観光旅行の行き先と回数、直近の宿泊を伴う観光旅行について、行き先、きっかけ、目的、情報収集、宿泊先、移動手段、同伴者など具体的な内容を調査した。宿泊を伴う観光旅行に限定したのは、既存研究で宿泊を伴う観光旅行を扱うデータが多かったためである。そのため、日帰り旅行や本来の目的が観光旅行ではなく別にあり、日常生活の圏外へ赴く旅行は調査対象に含まないこととした。

調査期間は、新潟大学が2013年11月5日～12日、専修大学が2013年11月14日と20日、成蹊大学が2013年11月11日、その他の学生が2013年11月13日である。配布・回収方法について、新潟大学は知人を介して知人の友人などを対象にアンケートを配布し、回収を依頼した。専修大学と成蹊大学は教員の協力を得て、授業時間内に実施し、回収した。その他の学生は直接配布し、回収をした。アンケート回収数は297部(新潟大学163部、専修大学111部、成蹊大学16部、その他の学生7部)、その内有効回答は257部(新潟大学139部、専修大学99部、成蹊大学12部、その他の学生7部)であった。アンケート調査の中で聞き取り調査への協力を依頼した結果、地方学生4人、都市学生14人からの協力を得て、地方学生には直接会って話を聞くことができ、都市学生にはメールを通じて調査を行った。

分析方法として、アンケート調査の各項目について地方学生・都市学生ごとの単純集計・クロス集計を採用した。分析をする際、新潟大学については大学3・4年生の回答者、専修大学では大学1・2年生の回答者が多くなっていることや、国立大学と私立大学という違いも考慮しながら進めた。また比較対象と

して用いる観光庁(2011a)の調査データ(「若年層の旅行性向・意識に関する調査・分析報告書」)は調査対象が18～25歳の学生であり、大学生に限定していないことを考慮しなければならない。

2. 大学生の旅行実態

2-1. 全体の傾向

有効回答を得られた大学生257人の「ここ1年の旅行回数」の平均回数は、1人あたり国内旅行が2.1回、海外旅行が0.24回であった。観光庁の全国調査の同項目と比較すると、国内旅行が2.32回、海外旅行が0.57回となっており、全国平均をやや下回る結果であった。しかし、旅行に行くきっかけをたずねたところ(複数回答可)、「旅行に行きたいと思っていたから」が6割あり、「知人に誘われたから」が最も多かった全国調査と比べて、今回の調査対象者は旅行に行く意思は強いように感じられる。直近の旅行先は国内旅行が全体の9割を占め、その行き先は首都圏や近畿、東海地方が上位に挙がり、全体として大都市を有する地域が選択されている傾向がある。海外旅行においては、北米(ハワイを含む)、東アジアや東南アジアが多く挙がっていた。旅行目的は「飲食を楽しむ」、「気分をリフレッシュする」、「自然景観を見る・触れる」の項目が、宿泊先では「ホテル」、「旅館」、「知人宅」の項目が多く挙がり、これらは全国調査と類似した結果となった。移動手段は「高速バス」、「新幹線以外の列車」、「自家用車」の項目が高く、新幹線、飛行機の利用が高かった全国調査と比較すると、費用を抑えているように感じられる。同伴者は友人が最も多く、次いで恋人、家族の順であった。

しかし、各設問において地方学生と都市学生で選択した項目の割合に差が見られた。以下ではこの差に注目し、地方学生と都市学生の旅行実態および旅行観を明らかにしていく。アンケート回答者の9割が直近の旅行で国内に行っていることから、主に国内旅行に焦点を当て、地方学生と都市学生の特徴を分析し

ていく。

2-2. 地方学生の国内旅行の特徴

地方学生の入学から現在までの国内旅行およびここ1年の国内旅行の平均回数は都市学生より多かった(表3)。地方学生と都市学生では調査対象者に学年の偏りが生じており、学年が上がるにつれて入学から現在までの旅行回数が増えていることが考えられるため、学年別(大学1・2、3・4年)にも分析を行った(表3参照)。その結果からみても、地方学生の平均回数は都市学生を上回っており、地方学生は都市学生より国内旅行に行くということがわかった。

直近の旅行についてその行き先をたずねると、東京都、神奈川県、千葉県が多く挙げられた(図1)。首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)を旅行先とした地方学生は全体の49%と回答者の約半数を占めたことから、地方学生は首都圏に行く傾向があるように思われる。観光庁(2011a)の全国調査で国内旅行に行った地域を回答者の居住地別にみたときに、甲信越地域の人が首都圏に行く割合が高かったことと類似しており、そのことからこの傾向を裏付けることができる。今回の調査において地方学生の旅行先が首都圏中心であったことから、旅行先を首都圏とした地方学生に限ってその目的、移動手段、宿泊先、同伴者から旅行の特徴をみていく。

1) 旅行目的

首都圏を旅行先とした地方学生の旅行目的は「飲食を楽しむ」、「テーマパーク・遊園地へ行く」、「気分をリフレッシュする」、「コンサート・野外イベントへ行く」「博物館・美術館へ行く」の順であった(図2)。今回の調査全体でも上位であった「飲食」、「リフレッシュ」を除くと、首都圏ならではの目的が上位に挙げられた。例えばテーマパークには千葉県の東京ディズニーリゾートが挙げられ、東京ディズニーリゾートを目的として首都圏を訪れたと考えることができる。続いてコンサート・野外イベントや博物館・美術館でも同様に、首都圏の公演数、施設数が地方より圧倒的に

表3 学年別国内旅行平均回数

	入学から現在	ここ1年
地方学生		
1・2年生	3.7回	2.8回
3・4年生	7.2回	2.5回
全学年	6.6回	2.6回
都市学生		
1・2年生	1.4回	1.3回
3・4年生	4.2回	1.9回
全学年	2.3回	1.5回

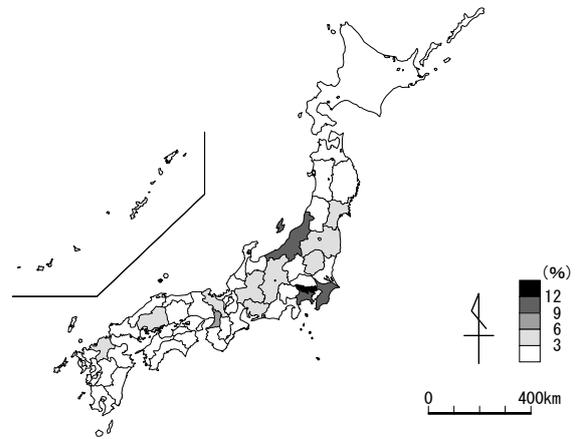


図1 地方学生(114人)の直近の旅行先(複数回答可)

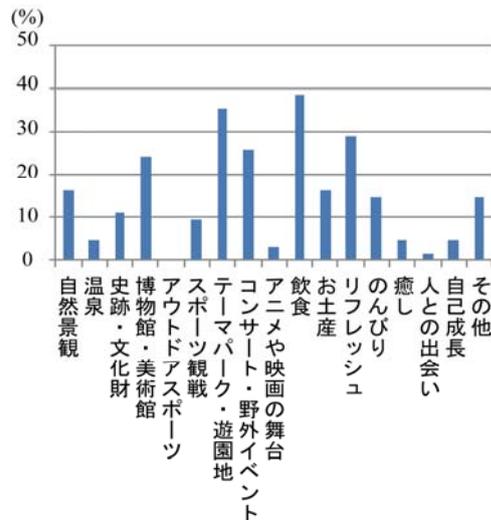


図2 首都圏を旅行先とした地方学生(62人)の旅行目的(複数回答可)

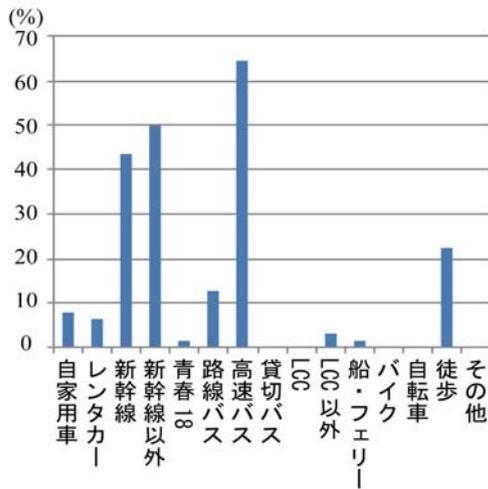


図3 首都圏を旅行先とした地方学生(62人)の移動手段(複数回答可)

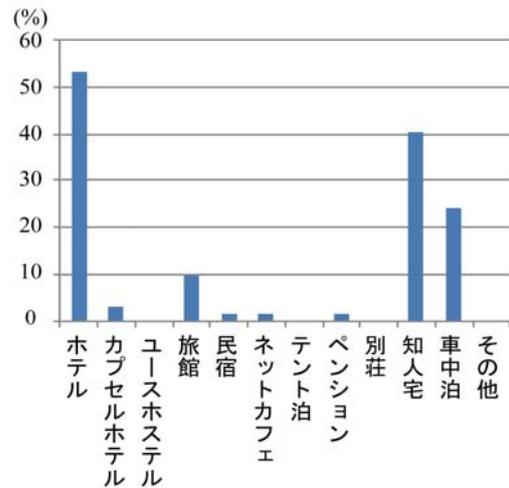


図4 首都圏を旅行先とした地方学生(62人)の宿泊先(複数回答可)

多く、それらを趣味とする人が首都圏へ行ったと思われる。旅行において特定のアクティビティやコンテンツを重視し、それが旅行の目的となっている人については旅行回数が多いとされている(観光庁 2009)。地方学生が首都圏に行くことにおいても同じことが考えられ、旅行回数も多くなっているのではないだろうか。

2) 移動手段

首都圏への旅行中に利用した移動手段をみると「高速バス」、「新幹線以外の列車」、「新幹線」の順に利用が高いことがわかった(図3)。ここでは、旅行先までの往復の移動手段としての利用が高いと思われる高速バスと新幹線を取り上げる。高速バスは朝～昼に出発する便と夜に出発する便があり、新幹線と比べて所要時間を要するが、価格は安く設定されている。高速バスを利用する場合、時期によって価格は異なるが、新潟～東京間の平均価格は片道で昼便が3,000～5,000円、夜行便が4,000～6,000円となっている。

一方、新潟県は上越新幹線が開通しており、新幹線を利用する場合には、最短時間で首都圏へ行くことができるが、高速バスに比べて費用はかかる。新幹線を利用する時、片道が101キロを超える距離の場合、大学生は学生割引¹⁾が適用され乗車券が大人料金の2割引

となる。新幹線の利用者が学生割引の乗車券を使用すると、新潟駅から東京駅までの運賃は自由席で片道8,668円となる。地方学生は新幹線の利用者に比べて高速バスの利用者の方が多いことから、首都圏に行く際には、交通費を抑える傾向があると考えられる。新幹線以外の列車においては、主に旅行先での移動手段として利用されていると思われる。

3) 宿泊先

宿泊先をみると「ホテル」に次いで「知人宅」、「車中泊」が多く挙げられた(図4)。知人宅とは進学等で上京した友人や、首都圏に住む親戚などの家に宿泊すると考えられる。車中泊の一部は、前述した高速バスの夜行便を利用した結果だと思われる。例えば1泊2日の旅行で夜に出発し、早朝に到着する夜行バスを使用した場合、宿泊先はバスの中となる。この二つの宿泊先に共通することは、宿泊費の出費が少ないということである。知人宅の場合には、宿泊の費用はかからず、夜行バスの場合にも交通費と兼ねることができる。地方学生の首都圏への旅行時の宿泊平均額は6,498円であり、調査対象者全体の国内旅行の宿泊費の平均額10,761円と比べても少ないことから、首都圏への旅行の際は交通費と同様に宿泊費も抑える傾向があると考えられる。

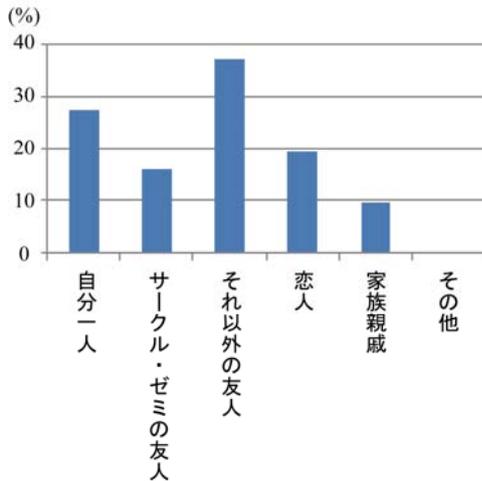


図5 首都圏を旅行先とした地方学生(62人)の同伴者

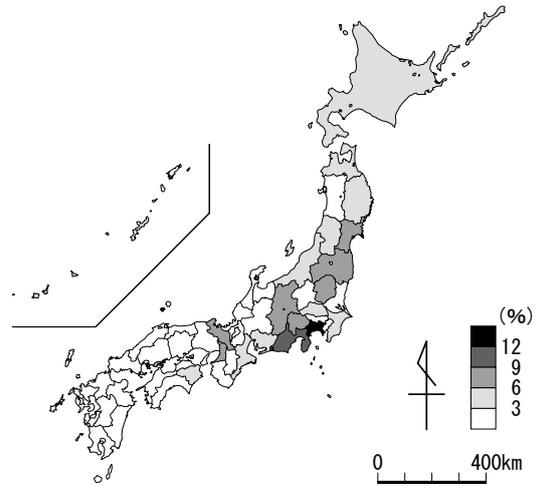


図6 都市学生(78人)の直近の旅行先(複数回答可)

4) 同伴者

同伴者は「サークル・ゼミ以外の友人」、「一人」が多く挙げた(図5)。また、同伴者別の宿泊先をみると「サークル・ゼミ以外の友人」、「一人」と回答した人は「知人宅」の割合が高い。その理由として、前述のように首都圏を旅行先とする地方学生は特定のアクティビティやコンテンツを旅行目的とする人が多いことから、旅行者と共通の趣味を持つ友人や気の合う友人と旅行を楽しむためと考えられる。一人と回答した人は、首都圏に住む友人を訪れ、ともに旅行するのではないだろうか。

以上のことから、地方学生の国内旅行の特徴として以下のことが挙げられる。地方学生はテーマパークやコンサートなど、特定のアクティビティやコンテンツを目的として首都圏へ旅行に行く傾向がある。現地での目的や飲食を重視するため、交通費や宿泊費を抑えようと考える。また同じ趣味を持つ友人たちと旅行を楽しんでいる。

5) その他の旅行先

ここでは直近の旅行で首都圏以外を選択した地方学生の旅行先をみていく。図1より旅行先として選択されている地域は、先に述べた首都圏と新潟県に集中していることがわかる。割合をみると、首都圏の次に高かった行き先は新潟県であり、同一県内を旅行する人

が多いことになる。同伴者をみると「サークル・ゼミの友人」が最も多く、旅行者が所属する団体での旅行先として県内を選択しているように思われる。移動手段では「自家用車」、「高速バス」の利用に続いて「貸切バス」が上位に挙がっていたことから、これを裏付けることができる。旅行目的は「温泉に入る」、「自然景観を見る・触れる」、「飲食を楽しむ」、「気分をリフレッシュする」が上位であった。団体での旅行は大人数で動くため、日程や予算の調整が難しいことから近場でゆっくりできる温泉を選択しているのではないだろうか。

2-3. 都市学生の国内旅行の特徴

都市学生は、入学から現在までと、ここ1年のそれぞれの期間において地方学生より国内旅行の平均回数が少ない(表3参照)。

まず都市学生の国内旅行において、その行き先に注目した(図6)。都市学生の旅行先は神奈川県、静岡県が多く、続いて大阪府、京都府が挙げた。神奈川県と静岡県がそれぞれ今回調査を実施した都市学生の主な居住地また近隣地域であることに注目し、旅行先を首都圏とそこに隣接する都道府県(茨城県、栃木県、群馬県、山梨県、長野県、静岡県)に絞ってみると、全体の56%がこれらの地域を旅行先として選択していた。この結果より、都市

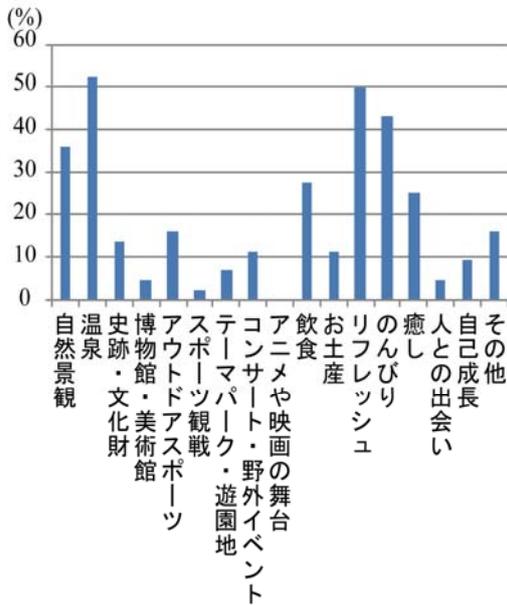


図7 近隣地域を旅行先とした都市学生(32人) 学生は居住地を含む近隣地域へ旅行をする傾向が強いと考えることができる。そこで旅行先が首都圏とその近隣地域であった都市学生に限って、その目的、移動手段、宿泊先、同伴者から都市学生の国内旅行における特徴を分析していく。

1) 旅行目的

都市学生の近隣地域への旅行目的をみると、「温泉に行く」、「気分をリフレッシュする」、「のんびり過ごす」の順で上位に挙げた(図7)。近隣地域には神奈川県箱根温泉、静岡県熱海温泉、群馬県草津温泉など、全国でも有名な温泉地が多くある。そのため、旅行目的として温泉地が選択されやすい一方で、「リフレッシュ」や「のんびり過ごす」の項目も高かったことから、都市学生は旅行に癒しや休息を求めているように思われる。

2) 移動手段

移動手段をみると「自家用車」、「新幹線以外の列車」の利用が多かった(図8)。近隣地域への移動ということもあり、自家用車や新幹線以外の列車の利用が多いと思われる。ここで注目したい点は、自家用車の利用の高さである。都市学生にとれば日頃の移動手段の多くは公共交通機関であろう。しかし、旅行時の移動手段でレンタカーではなく、自家用車

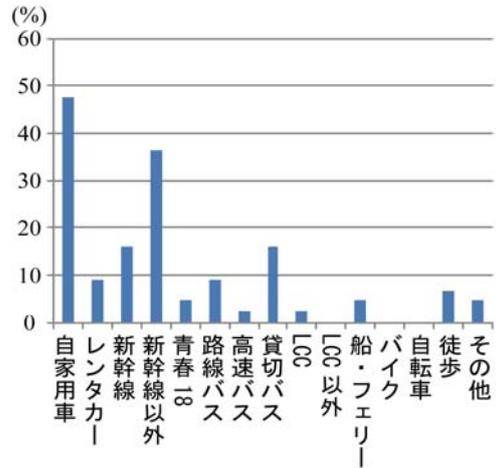


図8 近隣地域を旅行先とした都市学生(32人)の移動手段(複数回答可)

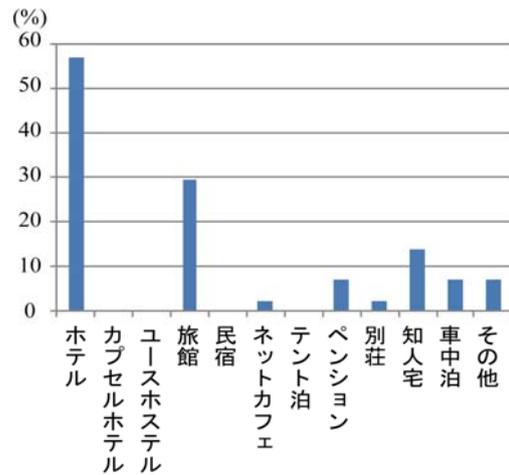


図9 近隣地域を旅行先とした都市学生(32人)の宿泊先(複数回答可)

の利用が高いということは、自家用車を保持しているか、保持している人と同行していることになる。まず現在の住まいをみると、都市学生で家族と同居している人は7割いることから、自家用車の保有割合も高くなるといえよう。なお、同伴者については後述する。

3) 宿泊先

宿泊先は「ホテル」、「旅館」が多く挙げた(図9)。これは、旅行目的に準ずる結果だと思われる。温泉目的の宿泊を伴う旅行ならば、ホテルや旅館を宿泊先とするのが一般的と考えられる。地方学生は目的を重視し、宿泊費

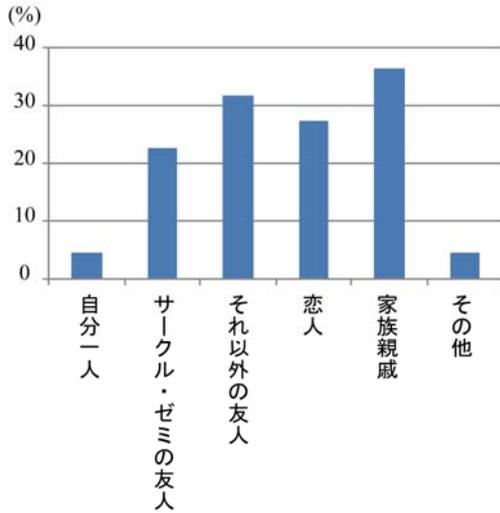


図10 近隣地域を旅行先とした都市学生 (32人)の同伴者(複数回答可)

を抑える傾向があることに比べて、都市学生は宿泊を目的とすることもあり、宿泊費は高いように思われる。

4) 同伴者

同伴者は「家族・親戚」、「サークル・ゼミ以外の友人」が多く挙げられた(図10)。移動手段における自家用車の利用が高いことは、家族・親戚と旅行に行く割合が高いこととつながりがあると考えられる。しかし、首都圏を含む近隣地域への旅行で自家用車を利用した中で、家族・親戚と旅行に行った人の割合は約5割と半数であった。残りの半分は、おそらく家族・親戚以外の同伴者の自家用車の利用であると考えられる。

以上のことから、都市学生の国内旅行の特徴として以下のことが挙げられる。都市学生は癒しや休息を求め、温泉を目的とした旅行に行く傾向が強い。その行き先は居住地を含む首都圏および近隣地域であり、比較的近場を選択している。移動手段は自家用車の利用が多く、その同伴者は家族・親戚、サークル・ゼミ以外の友人であった。

5) その他の旅行先

ここでは直近の旅行で首都圏・近隣地域以外を選択した都市学生の旅行先をみていく。図6をみると、旅行先は東日本に集中している傾向がある。図1の地方学生の直近の旅行

表4 学年別海外旅行平均回数

	入学から現在	ここ1年
地方学生		
1・2年生	0.0回	0.0回
3・4年生	0.9回	0.3回
全学年	0.8回	0.2回
都市学生		
1・2年生	0.2回	0.2回
3・4年生	0.8回	0.4回
全学年	0.4回	0.3回

先と比べると、地方学生より遠方まで旅行に行っていないことがわかる。東日本の中でも、前項までに取り上げた首都圏・近隣地域を除くと、特に東北地方の割合が高くなっている。東北地方(青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県)を旅行先とした都市学生は全体の28%を占めている。東北地方への目的を分析すると、「のんびり過ごす」、「気分をリフレッシュする」、「飲食を楽しむ」、「温泉に入る」の順で多く挙げられた。これは前項までの首都圏・近隣地域を旅行先とした場合の旅行目的と類似する。このことから、都市学生は旅行目的として温泉に入ることや気分をリフレッシュすることを重視し、日程や予算など様々な条件に合う行き先を決めているのであろう。

2-4. 海外旅行に対する意識調査

1) 海外旅行の実態

海外旅行において、地方学生と都市学生の平均回数を全体と学年別にわけてみていく(表4)。

入学から現在まで、地方学生の海外旅行回数が都市学生より上回っており、ここ1年では都市学生が地方学生を上回っている。都市学生のここ1年の旅行平均回数では、国内旅行について地方学生より少なかったが、海外旅行の回数では地方学生より多かったことから、地方学生より海外旅行に行く傾向があるのではないかと考えられる。

学年別でみると、まず両学生とも1・2年次より3・4年次の回数が多いことから、学年が上がるにつれて海外旅行に行っている傾向が

あると思われる。次に地方学生と都市学生を比較すると、1・2年生においては両方の項目で都市学生が地方学生を上回っており、3・4年生においてはここ1年の平均回数で都市学生が地方学生を上回っている。つまり海外旅行の実態としては、学年が上がるにつれて旅行回数が増えており、地方学生と都市学生を比較すると都市学生の方が海外旅行に行く割合が高い傾向があるといえる。

この結果を踏まえて、海外旅行における地方学生と都市学生の地域差を明らかにするために、アンケート調査項目から分析を行った。まず旅行形態に注目した。直近の海外旅行の旅行形態をみると、全体で個人旅行が87%、ツアー旅行が13%であった。海外旅行の旅行形態を地方学生と都市学生別にみると、地方学生はツアー旅行の割合が高く、都市学生は個人旅行の割合が高いことがわかった(図11)。

次に海外旅行の旅行先をみる(図12)。北米(ハワイを含む)を除く、ほかの項目では、地方学生と都市学生で差が顕著にみられる。地方学生は東南アジア、ヨーロッパを選択している割合が高く、都市学生は東アジア、サイパン・グアムを選択している割合が高い。地方学生が多く選択している東南アジア、ヨーロッパは日本から遠方にあることから旅行費用が多くかかる。都市学生が多く選択している東アジア、サイパン・グアムは日本からの距離が近く、旅行費用も比較的安価で行くことができる。

次に海外旅行の旅行目的について地方学生と都市学生を比較した(図13)。地方学生と都市学生が選択している項目は同じものが多いが、項目一つごとの割合は地方学生の方が高くなっている。地方学生が多く項目で割合が高く、一度の海外旅行での目的が多い。一方、都市学生は、海外旅行での目的を絞っているということになり、目的を明確にして海外旅行をしているのではないかと考えられる。

以上のことから、海外旅行における地域差をまとめると、地方学生はツアー旅行を利用して海外に行くことが多く、行き先は東南アジア、ヨーロッパなど日本から距離が離れている地域が多い。海外旅行の目的が多目的で

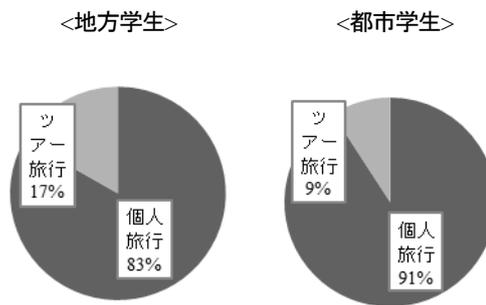


図11 地方学生(12人)と都市学生(11人)の海外旅行形態

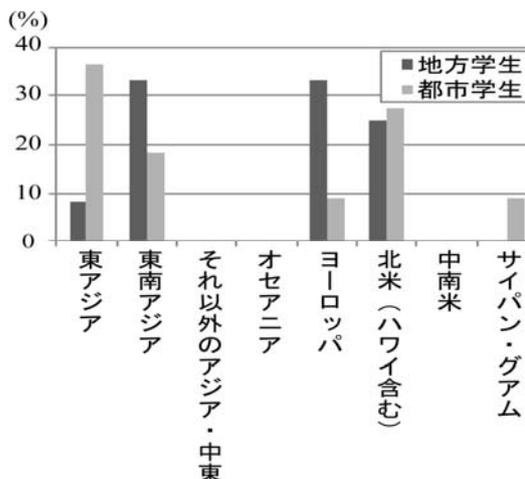


図12 直近の旅行で海外旅行を選択した人の行き先(複数回答可)

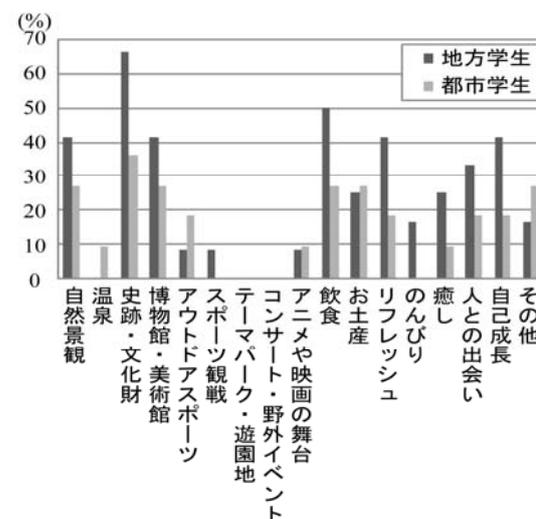


図13 海外旅行の目的(複数回答可)

あることは、なかなか行けない遠方へ旅行するからであり、一度の旅行を充実させているのではないかと考えられる。一方、都市学生は個人旅行で海外に行くことが多く、行き先は東アジア、サイパン・グアムなど日本からの距離が近い比較的安価で行ける地域である。これは都市学生の旅行目的が明確になっていることに関係していると考えられる。行き先までの距離が近く、安価で行けることは、海外旅行回数を重ねられる理由になっているのではないだろうか。

また、海外旅行の実態において地方学生と都市学生で共通していたことがある。行き先は北米(ハワイを含む)が多く、旅行目的は項目によって割合に差があるものの、選択している項目は類似していることである。海外旅行において地域による違いを検討したが、アンケート調査項目の分析から国内旅行のような明らかな違いを見いだすことはできなかった。

2) 聞き取り調査

アンケート調査項目の分析から明確な地域差を得ることができなかったため、海外旅行の実態について聞き取り調査を実施し、海外旅行への意識をたずねた。この項目では地方学生3人、都市学生5人から協力を得た。

まず、海外旅行に行きたいと思うかという質問に対して、全員から行きたいと思っているという回答を得たことから、海外旅行への興味はあるように思う。しかし、実際に海外旅行へ行こうと思うかという質問に対しては地方学生と都市学生で違いがみられた。地方学生は、海外旅行に行きたいが、実際は費用や時間、タイミングがないため海外旅行に行けないという回答がほとんどである。一方、都市学生は「海外旅行に行くための貯金をしている」、「海外旅行に行く計画を立てている」など海外旅行への意識が高く、具体的な動きをしていることが回答からわかった。

海外旅行に対して都市学生の方が主体的であり、海外旅行に行く意思を感じられたが、地方学生は都市学生ほど海外旅行に行く意思は強くないように感じられた。地方学生は海外旅行に行かない分を国内旅行へ回すため、

国内旅行の回数が増えていると考えられる。この結果が地方学生と都市学生の海外旅行への意識差であると一概にはいえないが、このような差が生じているのはなぜだろうか。

これについて、地方学生への聞き取り調査で気になる回答を得た。それは交通面についてである。身近な空港に新潟空港があるが、航空機の便数および行き先に限りがあるため、羽田空港や成田空港を利用する機会が多いという。その時、空港までの移動時間や移動費がかかることから、心理的に海外旅行が遠くなるという認識が生まれるのではないかと考えられる。都市学生には、大きな国際空港が身近にあること、国際便数が多いこと、格安航空(LCC)の就航環境が整備されていることなどが当たり前の環境となっているが、地方学生にとれば海外旅行を躊躇する要因となっているのではないだろうか。

3. 出身地・居住地別の旅行実態

本稿は地方学生と都市学生の旅行実態を把握し、地域による旅行観の違いを明らかにするものであるが、ここでさらに出身地の地域差にも注目し、旅行観への影響をみる。アンケート回答者の出身地を地方と都市に分け、地方出身の地方学生(127人)、都市出身の地方学生(12人)、地方出身の都市学生(43人)、都市出身の都市学生(75人)の四つに分類し、分析を行った。なお、都市出身の地方学生のサンプル数が12人と非常に少ないため、参考として扱う。

3-1. 地方出身の都市学生の特徴

分析の結果、地方出身の都市学生が他のタイプと比べて異なる特徴があったため、以下に取り上げて述べる。

1) 旅行回数についての分析

4タイプごとに国内・海外旅行における入学から現在までの旅行回数および、ここ1年の旅行回数を0回と1回以上に分けた(表5)。国内・海外旅行ともに都市出身の地方学生が1回以上行く割合が高く、今回の調査対象者

表5 出身地・居住地別国内・海外旅行回数

出身地	居住地	入学から現在まで			ここ1年		
		0回	1回以上	平均	0回	1回以上	平均
国内旅行							
地方	地方	8.1%	91.9%	6.3回	13.7%	86.3%	2.4回
都市	地方	0.0%	100.0%	9.3回	8.3%	91.7%	3.9回
地方	都市	41.9%	58.1%	1.8回	40.5%	59.5%	1.3回
都市	都市	27.8%	72.2%	2.6回	24.6%	75.4%	1.6回
海外旅行							
地方	地方	70.7%	29.3%	0.7回	85.8%	14.2%	0.2回
都市	地方	50.0%	50.0%	1.1回	75.0%	25.0%	0.3回
地方	都市	78.1%	21.9%	0.3回	87.2%	12.8%	0.2回
都市	都市	75.4%	24.6%	0.5回	77.9%	22.1%	0.3回

となった都市出身の地方学生は旅行に行く回数が多いことがわかった。反対に国内・海外旅行ともに0回の割合が高かったのは地方出身の都市学生であり、旅行に行く回数が少ないということになる。

次に1ヶ月自由に使える金額を検討する(図14、表6)。全体の平均金額が4万円であることにに対して、都市出身の都市学生のみ平均を下回っている。平均金額が最も高かったのは、地方出身の都市学生であった。先程の旅行回数では最も旅行回数が少なかったグループが最もお金を有しているということである。つまり、地方出身の都市学生は、お金はあるが、旅行に行っていないということになる。これより地方出身の都市学生は旅行に行く時間がないのではないかとということが考えられる。

ここで、旅行に行かない・躊躇する理由の回答をみている(図15)。全体的に費用面の理由が最も高くなっているが、地方出身の都市学生においては時間がないことが最も高くなっている。これによって、先程の仮説を裏付けることができる。地方出身の都市学生は時間がないため、旅行に行っていないということになる。なぜ時間がないのだろうか。地方出身の都市学生が旅行に行かない要因について、聞き取り調査の結果から考察する。

2) 聞き取り調査

地方出身の都市学生5人に対して、電子メールで聞き取り調査を行った。その結果以下の3点が、時間がない要因として挙げられる。

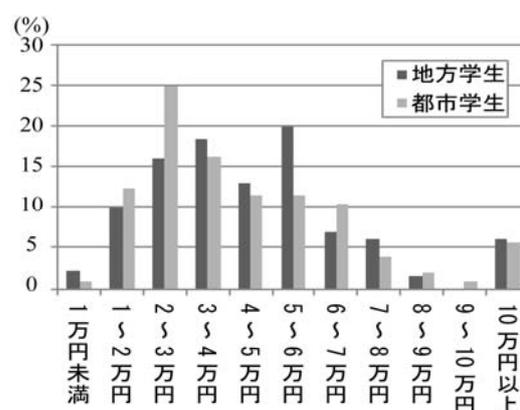


図14 1ヶ月自由に使える金額の分布

表6 出身地・居住地別1ヶ月自由に使える平均金額

	平均金額
地方学生	
うち地方出身者	4.1万円
うち都市出身者	4.0万円
全体	4.1万円
都市学生	
うち地方出身者	4.2万円
うち都市出身者	3.7万円
全体	3.9万円

一つ目はアルバイトである。親からの仕送りの他に自分が自由に使うお金を得るためにアルバイトをすることで、時間が取られているという意見が多かった。中には親からの仕送りを受けず、自分で生活をまかなっている人もいると考えれば、なおさらアルバイトに

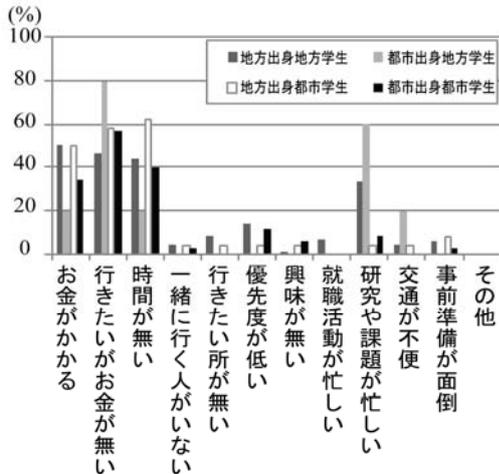


図 15 旅行に行かない・躊躇する理由 (複数回答可)

かける時間は多いだろう。また、私立大学のためさらに学費がかかることもあると思われる。

二つ目は地元への帰省である。多くの学生は長期休暇の際に旅行に行くことが多いと考えられる。しかし、地方出身の都市学生は長期休暇になると地元へ帰省する。これが旅行回数の少なさに繋がっていると考え、地方出身の都市学生は、長期休暇を地元への帰省に使うため、地方出身の地方学生や都市出身の都市学生に比べると旅行回数が少ないと思われる。

三つ目は都会で生活をしていることへの満足感である。地方出身の都市学生は上京していることで既に満足しており、この先どこかへ行こうという気持ちが少なくなっているという意見があった。また、都会には物が溢れており、観光名所もあるため遠方に行かなくても旅行気分を味わうことができるため、近場を選択するという意見もあった。

3-2. その他のタイプの学生の特徴

1) 地方出身の地方学生

入学から現在まで、およびここ1年の国内旅行の回数をみると、どちらとも1回以上の割合が85%以上であり、国内旅行に行く割合が高い。海外旅行をみると、入学から現在までの旅行回数では、サンプル数が少ない都市

出身の地方学生 50%を除くと、29.3%が1回以上海外旅行に行っており、他のタイプの中で最も高い割合であった。これは、アンケート対象者が3・4年生に多かったことが表れていると思われる。しかし、ここ1年の海外旅行回数では、14.2%と他のタイプの中で最も低かったことから、地方出身の地方学生は1・2年の頃に海外旅行に行っていたと考えられる。つまり、地方出身の地方学生は、3・4年次は国内旅行には行っているが、海外旅行に行っていないということになる。

ここで、3・4年次の大学生生活に注目すると、就職活動や卒業論文・研究がある。特に地方の学生にとっては、海外旅行は国内旅行に比べて、費用も時間も要することから、勉強や就職活動を生活の中心に行い、旅行に行く時間が取れないのではないだろうか。さらに旅行へ行くお金を貯めるためのアルバイトをする時間もないため、海外旅行の回数が少なくなっていると考えられる。地方出身の地方学生の旅行に行かない理由・躊躇する理由をみると、「お金がない」、「就職活動が忙しい」、「課題や研究が忙しい」が多くあがっている(図15参照)。

2) 都市出身の地方学生

今回の調査では都市出身の地方学生のサンプル数が少なく、傾向をつかむことは難しいため、都市出身の地方学生の実態から特徴を述べる。調査対象の12人は入学から現在までの国内旅行において、1回以上の割合が100%であり、ここ1年の国内旅行でも1回以上の割合が91.7%であることから、国内旅行に行く割合が高い。海外旅行をみても、入学から現在までの海外旅行の1回以上の割合は50%、ここ1年の1回以上の割合は25%と高い。限られたサンプル数ではあるが、都市出身の地方学生の特徴は国内・海外問わず、旅行回数が多いということである。

3) 都市出身の都市学生

ここ1年の海外旅行の回数をみると、1回以上の割合が22.1%で、サンプル数が少ない都市出身の地方学生の25%を除けば、ほかのタイプの中で最も高い割合であった。前述したように、都市学生は地方学生よりここ1年

の海外旅行の平均回数が多かったが、その内訳は都市出身の都市学生の割合が高かったということになる。しかし、1ヶ月自由に使える金額は最も少なく、旅行に行かない・躊躇する理由でも「行きたいが、お金がない」の項目が最も高かった。つまり、海外旅行回数が多いものの、費用がないということである。見方を変えると、海外旅行に行くために費用を貯金しているため、自由に使える金額は少なくなっていると考えられる。都市出身の都市学生のはほとんどは家族と同居しているため、生活面での出費は他のタイプと比べると低く抑えられているのではないかとと思われる。

4. 考察

若者の居住地の地域環境に焦点をあて、地方学生(新潟県)と都市学生(東京都・神奈川県)の旅行実態を分析した。その結果、国内旅行においては、地方学生と都市学生では旅行の回数や実態に違いがあることが明らかになった。国内旅行の回数が多かったのは地方学生であった。旅行先と旅行目的についてみると、地方学生はテーマパークやコンサートをはじめとする特定のアクティビティやコンテンツを目的に首都圏に行く傾向が高かった。一方の都市学生は癒しや休息を求め、温泉を目的に首都圏を含む近隣地域に行く傾向が高かった。こうしてみると、佐々木(2007)が述べているように、旅行先は旅行目的に応じて決まることがうかがえる。また、移動手段や宿泊先においても、旅行目的に応じて選択されているように思われる。

海外旅行においては、地方学生と都市学生では都市学生の方が海外旅行に行く傾向があることがうかがえた。都市学生は国内旅行の回数は少なく、海外旅行の回数が多いということになる。このことから、都市学生は海外旅行に重点を置くため国内旅行への時間と費用を抑え、その分を海外旅行へ費やしていると考えられる。

また、都市学生の海外旅行の実態より、旅行目的を絞り日本から比較的近距離の地域を

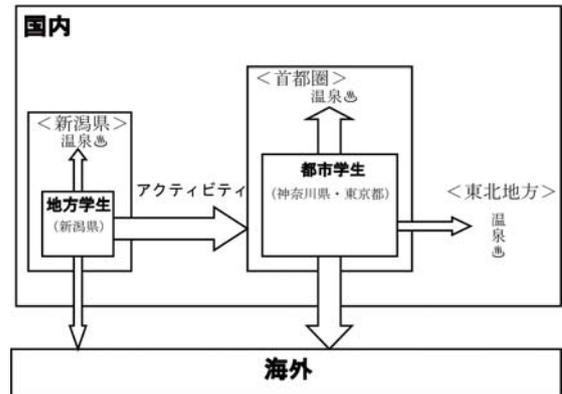


図16 地方学生と都市学生の旅行実態

旅行先としていることがわかった。つまり、今後同一の旅行先へ異なる目的で旅行に行くことが考えられる。しかし、海外旅行は旅行回数と旅行目的以外の各項目でも分析を試みたが、国内旅行に比べて居住地による地域的な差がみられなかった。この結果から、海外旅行への居住地の地域差は関係が薄いのかもしれないと考える。それは、海外旅行は国内旅行ほど自分の現在地からの条件に合わせて旅行を考えている面が少なく、海外旅行に行くとなれば、行き先問わず海外に行くという行動自体を考えるからではないだろうか。

2章をもとに地方学生と都市学生の旅行の実態をまとめると、以下のような図であらわすことができる(図16)。

これまで地方学生と都市学生の国内旅行と海外旅行の実態についてみてきたが、ここで旅行回数に注目して考察をする。全体的には都市学生の旅行回数が少ないことがわかった(表3、4参照)。この結果より、旅行に行かないといわれている若者の中で、都市に住む学生が増えているのならば、全体として旅行に行かない若者の人数が増えていると考えることができる。

ここで、都市における若者の増加数を検討してみよう。文部科学省が行っている学校基本調査²⁾より、大学の学部生数の変化を都道府県別にみる(図17)。インターネットからデータを閲覧することができる中で最も古い1993年度と、最新データである2013年度を比較した。

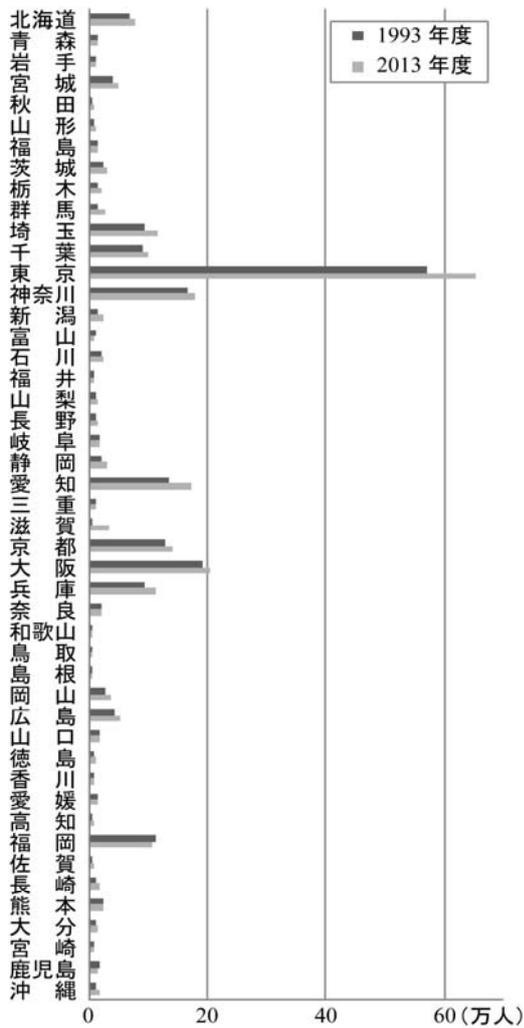


図 17 都道府県別学部生数
資料：文部科学省『学校基本調査』

学部生数が際立って抜き出ているのは、前述した都市の定義に当てはまる首都圏、中京圏、関西圏の都府県であることがわかる。1993年度から2013年度までの20年間で増加した学部生の人数433,169人のうち、首都圏と中京圏、関西圏で増加した学部生数は246,902人であった。全体の増加数の半分以上が都市で増えたということになり、都市の人口が増加したといえる。一方地方をみると、20年間の増加幅が小さいところが多く、また減少に転じているところもあり、地方の学部生は都市ほど増加していない。

以上の結果より、20年間で地方の大学生数

よりも都市の大学生数が増えていることがわかった。今回の調査結果から考えると、都市の学生が増えていることから旅行に行かない層が増えると考えられる。つまり、都市の人口増加にともなって若者の旅行離れが進んでいるといえるだろう。このように、地域差という視点から若者が旅行に行かなくなった理由を考察すると、若者の人口分布が変わったことがひとつの要因であると考えたい。

次に旅行に行かない理由について考察する。地方学生の海外旅行の回数が少なかった理由および地方出身の都市学生の旅行回数全体が少なかった理由に注目する。まず、地方学生の海外旅行に行かない理由についてである。聞き取り調査から地方学生が海外旅行に行かない理由として、居住地からの交通の不便さが挙げられた。空港まで行くことに時間や費用がかかることから、海外旅行を計画するにあたって、心理的な理由があることがわかった。次に、地方出身の都市学生が旅行に行かない理由についてである。地方学生と都市学生の出身地をそれぞれ地方と都市にわけ分類した際に、地方出身の都市学生が旅行に行かない理由を検討した。その結果、地方から都市に出てきたことから派生している理由がほとんどであった。

このように出身地や居住地によって、旅行に行かない理由が異なることが明らかとなった。しかし、既存の研究から若者が旅行に行かない理由として時間的・経済的な理由があげられており、今回の調査でも類似していたため(図15参照)、地域差による理由が絶対的なものではない。この結果から、この先若者が旅行に行かない理由を検討する際は、既存の研究で明らかになっていることと合わせて、地域固有の理由も念頭に置き進める必要があると考える。

5. 結び

本稿では若者の旅行離れにおいて、地域差という視点から検討をおこなってきた。今回の調査は新潟県の新潟大学、神奈川県の特修

大学、東京都の成蹊大学の学生を中心に行なったため対象に限りがあり、サンプルにも偏りがあった。そのため、分析結果がどの地方学生や都市学生にも当てはまるとは言えないが、ある程度の傾向をつかむことができたと考える。また、今回の調査で扱った旅行について、アンケート調査で旅行の時期や期間を把握しなかった。アウトドアスポーツなど、旅行の実施時期に左右される旅行目的もあると考えられるため、実施時期と旅行目的の関係については今後の課題として研究したい。

既存の研究では、若者の旅行離れにおいて対象とする若者は、時間的・経済的面で条件を考慮し、学生と社会人、未婚者と既婚者などの分類によって調査が進められているものが多い。今後、若者の旅行離れを検討するには、今回の調査のような居住地環境による地域差という見方にも目を向けていく必要があると考える。

謝辞

本論文は、2013年度に上越教育大学学校教育学部提出した卒業論文をもとに加筆・修正したものである。

アンケート調査に際して、貴重なお時間を割いてご協力頂いた新潟大学生、専修大学生、成蹊大学生、高校の同輩や後輩の皆様には深く感謝致します。また、アンケート調査において貴重なお時間を提供頂き、ご協力下さった専修大学文学部環境地理学科 赤坂郁美先生に深謝致します。本研究を進めるにあたり、テーマの決定、研究の考え方や進め方など終始丁寧かつ熱心なご指導、ご鞭撻頂きました矢部直人先生に心より感謝致します。皆様のご協力なしでは卒業論文を完成させることはできませんでした。本当にありがとうございました。

(上越教育大学 学校教育学部 初等教育教員養成課程 教科・領域教育専修 社会系コース 2013年度卒業)

注

- 1) JR 東日本旅客鉄道株式会社 HP <http://www.jreast.co.jp/kippu/0701.html>(最終閲覧日:2014年1月21日)
- 2) 政府統計の総合窓口 e-stat <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>(最終閲覧日:2014年1月28日)

参考文献

- 金川由紀 2010. 大学生の旅行ばなれ現象に関する検証—国内旅行における温泉の魅力—. 日本観光研究学会全国大会学術論文集 25: 213-216.
- 金 春姫・鎌田裕美 2010. 若者の旅行に対する意識. 成城大学経済研究 188: 177-191.
- 国土交通省観光庁 2008. 『平成 20 年度観光の状況』 <http://www.mlit.go.jp/hakusyo/kankou-hakusyo/h21/images/01.pdf> (最終閲覧日:2013年12月18日)
- 国土交通省観光庁 2009. 『平成 21 年度版観光白書「平成 20 年度観光の状況」』(最終閲覧日:2014年1月17日)
- 国土交通省観光庁 2011a. 『若年層の旅行性向・意識に関する調査・分析報告書』 <http://www.mlit.go.jp/common/000161446.pdf> (最終閲覧日:2013年12月18日)
- 国土交通省観光庁 2011b. 『若者旅行振興の必要性について』 <http://www.mlit.go.jp/common/000161444.pdf> (最終閲覧日:2013年12月18日)
- 佐々木土師二 2007. 『観光旅行の心理学』北大路書房.
- 日比野直彦・佐藤真理子 2012. 若者と旅—若年層の国内観光行動の時系列分析—. 国際交通安全学会誌 37: 142-150.